

お辞儀と握手

人に会って挨拶をする時、日本人はお辞儀をします。一方で欧米の方などは、握手をします。今回は『お辞儀』と『握手』について紹介します。

『お辞儀』は飛鳥時代から奈良時代に、中国の礼法(立礼)^{りゅうれい}を取り入れたのが始まりとされているそうです。

その後、戦や権力闘争により鎌倉時代の武家政権が樹立し、身分制度・秩序制度を重んじるようになり、場面や上下関係によりお辞儀は細分化(目だけ、首だけ、手の形や頭を下げる深さなど)してきました。頭を下げることで相手に対し敵意がない、無防備であるという事を示していると言われていています。この頃は畳や板の間での座礼が中心で、武家の作法として洗練され培われていきました。

明治時代になり武家の作法が庶民の生活に取り入れられるようになりました。西洋文化が入り椅子を使うようになり、座った姿勢から立った姿勢^{りゅうれい}に変わり、座礼から立礼^{りゅうれい}に変わっていきました。明治15年の学校教育の礼儀を表した「小学諸礼式」に、「立礼に最敬礼及び敬礼の二つあり」と記され、その所作を学校で教えられました。

江戸時代からの200以上の藩を一つの近代国家にまとめる時、全国に共通の挨拶として学校で教えられたことで、お辞儀が庶民に浸透していったそうです。

現代の私たちはそれを脈々と受け継いでいるのです。



一方欧米では、「握手」が当たり前のように行われますが、日本にはその習慣がありません。

『握手』は、中世の騎士の挨拶がルーツと言われています。右手で握り合うのは、利き手に武器を持っていないことを示し、戦う意思はなく、仲間であることを認め合うためです。

現代のビジネスシーンでは欠かせないものになっています。握手のポイントは、最初から最後まで、笑顔で相手の目を見つめることです。名刺交換はその後に行います。

『お辞儀』も『握手』も元は、相手に敵意がないことを示すためのものでしたが、現代では相手に対しての敬意や感謝を表すものと言えますね。

コロナ禍の世界各国では接触をできるだけ避けようと、肘と肘を合わせたり、足先と足先を合わたり、合掌をしたりなど、様々な方法で挨拶をしています。

また、宗教における「お辞儀」は注意すべき事があります。キリスト教では、尊敬や服従を表すためにお辞儀をします。例えば祭壇の前を通る時、礼拝時にイエス・キリストの名前が出た時にお辞儀をします。イスラム教では、神に対してのみ行われるもので、人間に対するお辞儀は忌み嫌われています。ユダヤ教では、モーゼの十戒の2つめの戒律にて神以外のものにお辞儀をすることが禁止されていると解釈されています。

外国の方と接する時、海外旅行をする時等、知っておくといいですね。

